

Title	雑報
Author(s)	
Citation	地球 (1924), 2(3): 454-462
Issue Date	1924-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/182738
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

雜報

○長崎縣雪の浦貝塚の石器時代人骨

日本石器時代の人骨の發見は大正五年當時京都大學地理學研究室助手たりし内田(寛一)文學士が備中空岡在の津雲貝塚で系統的に發掘した後漸く學者の注意を惹いて、其後河内道明寺、越中氷見、陸前松島等の發掘があり、京都大學の故鈴木(文太郎)、清野兩教授東北大學の窪部松本兩教授等の石器時代の骨骸研究が學界に報告されて、日本の先史時代住民の實體が明瞭となりつゝある。九州では熊本附近の人骨が早く故鈴木教授に注意されたが、最近肥前國西彼杵郡雪ノ浦からも發見されたこの報告がある。

雪ノ浦は西彼杵半島の西岸で炭坑で有名な松島の對岸瀬戸の南にある。結晶片岩中に處々に蛇紋岩の噴出した地方であるから、他に餘り類を見ない所の石鍋なども發見された。大阪朝日新聞(八月十三日)所載長崎醫科大學八重津輝勝氏の談話によれば、同氏の調査に赴かれた時には貝塚内の人骨は他に移されて埋葬状態は明かでないといふが、胛骨に石鏃の突立つたまゝ存在し、又黒曜石の石鏃、打製石斧、石匙、彌生式土器破片等を出し、又た春山山頂に石鍋製造の遺跡も發見されたといふ。此の發見によつて九州の西北端に於ける先史時代住民の骨骸が出た譯で、今や奥羽北陸東海近畿中國九州に亘つて知れて来たのは面白い。特に今回の發見地は魏志の倭人の本場間違のない

第二卷

第三號

圖書

六八

い處であるだけに其の研究結果の如何は多大の興味あるべく期待される。(小川)

○青炭の未來の勝利

石炭の時代は去りつゝあつて現時では白炭と呼ばれる、流水力時代が來た。日本の水力電氣事業の隆盛なのを見るものは此の感が深からざるを得ない。然し白炭の次に來るべきものは何であるかと云ふと海の潮汐を利用する所謂青炭 (Blue coal) である。一體潮汐のことは數學者によつて解決されたものであるが爲に地理學者にして之を取扱ふものが少なかつた。クリムメルは潮汐研究が地理學者を待たなければならぬ事を高唱した。潮汐の利用が可能になつて行くに従つて潮の上り下りが一定して居ない爲めの不利を無くする工夫が工學者や物理學者によつて研究されると同時に地理學的に之を充分に研究する必要がある。佛蘭西の英吉利海峡に面したアペル・ヴラシ(アレスト)北の二十五軒の入江では潮力を利用して居るに云ふことであり且つ我が朝鮮でも其の潮汐の差の劇しいのを利用する計畫のある今日では、之を地理學家が研究して未來の青炭時代に備ふる所があつて然るべしと思へる。(中村)

○佛國の養蠶

佛國絹業聯合組合長フーヅエール氏曰く、佛國諸工業中絹織物工業は、三十萬の従業者を有し、原料は主として之を外國に仰ぎ、客年の如き約十億法を支拂たるも、一度之に撻繻染色仕上等の功工を施し、本年は二十億法の輸出を見るべく、消費制限は却て生産制限を來すべきあり、然れども外國よりの原料供給を脱せんが爲に努力すべきは、佛國専門家

營業者の全く一致せる所にして、之が爲絹業聯合組合は、養蠶振興に努力し、一九二一年度生絲生産高十九萬八千基は、昨年度に於て二十五萬基となり、本年度は四十萬基なるべし、於茲佛國農業家は桑樹の栽培及養蠶業に努力し、今後五年内には百萬基となり、現今の相場にて約四億法の生絲が國內に於て生産せらるゝに至るべし云々。

○伯國產棉花生産の將來

世界は過去長期に亘り、原棉の供給を米國に仰ぎ、今尙依然米國に依頼すませば、其當然の結果として原棉の一大缺乏即ち原棉飢饉の到來は避け難かるべし、何となれば米國の棉花生産は漸次減退し、質亦漸次低下せるのみならず、ボールウィールの猖獗なる爲、年々生産の四分の一乃至三分の一を消失し、且近來移民制限のために勞力不足を訴へ、これ迄南部諸州に居住せし農民は工業地に移住し、農民の數減じ、爲めに生活費漸騰し、棉花生産費亦自然上昇し十片乃至十一片以下は勿論場合によりては一志を告ぐるの結果となり、かくて世界人類大部分の衣服として安價なりし綿布が高價の爲めに漸次人を惹き付けざるべきこと明なり、然らば米國以外の棉花耕作可能如何を考ふるに印度、並に埃及の二國あり、此中印度耕地面積は二千萬エーカー乃至二千五百万エーカーに過ぎず且其產出歩合少く、又其の質も惡しく、埃及はナイル河沿岸半哩の地帯が肥沃にして細長き國なるが故に耕作區域に制限あり、其生産に増加なきよりも寧ろ減少の傾あり、亞利加内地の耕作は可能なれどもまた容易ならず、かくて將

來に圖目さるゝ處は獨り南米のブラジルあるのみなり。同國の產は儀裝惡く繰棉方法不良且不潔なれども最慎重に耕作し居る地方の生産率は、米國に比すれば二倍半乃至三倍し却て良質の棉花を比較的低廉の生産費を以て產出するを得べしと云ふ。將來北部ブラジルの全部をあげて棉花地帯となすことを得べきを見れば、この國の開發は誠に世界的に重要なりといふをうべし即ヒアス氏の意見によれば「米國の棉花耕作地は、いかに之を擴大するも三千八百萬噐以上に出づる能はざれども、伯國に於ては其四倍にまで發展せしめうべし」と

○甲谷陀の近狀

カルカッタは人口百三十餘萬、諸英領中の最大都市にして、孟買に於ける棉花、關貢に於ける米、カラチに於ける小麥の如き、特殊商品としては黃麻及同製品（黃麻布及麻袋）を擧げるを得べし、他港に比し輸出時期に基く消長無く、四季を通じて引續き輸出繁盛に、又ガンデス河畔の廣大なる消費地を控へて輸出港としても重要な地位を占め、一九二三年三月に於ける貿易額は、全印度の貿易額に對し輸入に於て三〇乃至四九％輸出に於て二五乃至五三％の高率を示し、從つて之が金融に當る爲替銀行の活動目覺きもあり、爲替市場の大なる實に豫想外にして、百數十萬磅の爲替賣買は、市場に著しき影響を與ふる事なく、容易に消化せらるゝ、英國及諸外國爲替銀行も印度に於ける金融及爲替の中心を當地に置くが如く、各地より倫敦向賣買の注文當地に頼濟するが如し、爲に自由競争頗る盛に英人士人を問はず輸出入商は好相場を唱ふる銀行に

稠集するを常とす。この地の特産たる黄麻布は逐年セメントの包装用として重んぜられ、逐年増加の勢にあり、更に昨年来米國にては自動車、ホルド製品、家具、其他從來木材を使用せしものに代用せらるゝ傾向著しきために當市のシェート工場は昨今の不況にも拘らず二三割の配當を爲す盛況なりといふ、ここに棉花の世界的不足は逐年増加の傾向にあり綿布代用としての袋布需用も穩健に増加しつゝ、あればこの地のシェート工場の前途は樂觀せらる。

○チリデルフネの未開民族

チリデルフネ(Chiriquí)がある。ハツシエ族は二十五年以前には約百名居たが一九一二年には僅か五人になつた。其の住所はフオイエルランドの南東隅で生産物に乏しい處である。オナ族は三十年前には三千人を數へたが最早五百人になつた、之は入り込んで來た白人に反抗したためフオイエルランドの北部邊地の羊群と共に壓迫を受けたのである。オナ族は略馬(Guano)を狩獵する。フアロング氏の希望する所に依るゝ此等の種族を保存する爲めにチリ及びアルヘンチンの政府によつて保育地を作つて略馬と共に繁殖さすべしとの事である。

○羅甸亞米利加の砂糖

コロンパスは彼の第二次の旅行の時にサント・ドミンゴに甘蔗を持つて來た、一五一五年には初めてアメリカの砂糖が西班牙に輸入された。其の後甘蔗栽培は急にキューバ、中央アメリカを経てメキシコ及ペルーに廣がつた十七世紀にはブラジルが世界の主要な砂糖國となり、此の和蘭

殖民地のみで一六三七年より一六四四年までの間に二千八百萬ガルテンの砂糖を輸出した。幸いで西印度がブラジルに代りハイチ及び小アンチルスが主要産地となつた。世界大戰の影響を受けて今では世界の主要な甘蔗糖の主産地はキューバ、ブラジル、ペルー及びボリトリコである。殊にキューバは今日では英領印度を凌駕して世界第一の砂糖の生産地である。

○露西亞に於ける鐵鑛床の發見

ラツアレフ教授、ステクロフ教授及アルカンゲルススキー地質技師の多年の調査に依つてクルスク(Kursk)州に大鐵鑛床が發見された。『クルクスの異常』と名づけられた同州の磁針偏向がある爲め、初めレイスト教授をして此問題に携はらした動機になつたのである。處が同教授は一九一八年に獨逸に移り、やがて急に死去した爲め此の仕事の完成を妨げた。一九一九年より一九二二年に至る間にラツアレフ教授は一萬二百點に互つて磁力測定をした、其の結果は北西—南東に走る幅二キロ米で長さ二百五十キロ米の一帯の地域に磁針偏向が劇しきことが判つた。磁力の最も大なる處はクルスク市の東北五十キロ米のステグリー(Stegler)とボロネシ(Boronsi)市の西南西八十五キロ米のオスコル(Oskol)であつて兩地の距離は九十キロ米ある。此の地域に試錐が行はれ其の結果約百五十米乃至百六十米の深さで菱苦土岩及珪岩に四十%の鐵が含有されてなり、もつと深い處では含鐵量が七十二%に達するものが知れた。鐵鑛の性質は瑞典のシェリヴァアラ、キルナヴァアラ及びバルオサヴァアラ鐵山のものに近い、今日までの

試掘の結果から見るミドン盆地からモスコオの炭田に互る廣大な鐵鐵床の一部を發見したのに過ぎないを考へられる。

○スエズ運河の旅客數を戦前との比較するには現時多くなつた軍人、追放者、移民等を控除しなければならぬが、之を除く一九二二年の旅客數は一九一三年と略同じで約十五萬八千人であつた。戦前には約三萬人即ち十九%は獨逸船によつて運搬されたが、一九二二年には澳太利船は全くなく獨逸船で約五百人しか通過しなかつた。それで各國の汽船で通過した旅客の數が一九一三年と一九二二年とで次の様な變化を來した

和蘭船	一四、〇〇〇(九%)	二八、〇〇〇(一八%)
英吉利船	八八、〇〇〇(五六%)	九三、〇〇〇(五九%)
佛蘭西船	一八、〇〇〇(一一%)	二〇、〇〇〇(一三%)
伊太利船	四、〇〇〇(二%)	七、〇〇〇(四%)
日本船	三、〇〇〇(一%)	七、〇〇〇(四%)

○印度スクル(Sukru)の灌溉工事 は昨年着手せられたが遠くアシユアン(Ashuan)から導水するのである。インダス河に八百五十米の長さの二個の堰堤を築き、七個の運河の内三個はスエズ運河よりも幅が廣く、最も長いのは三十二キロ米に達する。掘鑿工事は百億萬立方呎の土砂を開掘するのであつて、之はスエズ運河の四倍であり、大ピラミッドの百倍に當る。灌溉地からは毎年二百萬噸の穀物及棉を取獲する豫定である云ふ。

○湖南の雨傘

湖南省は雨傘各種材料の產出に富み、其の

製作に便益多く年產額百二十餘萬本に達し近年日本及南洋方面にも盛に輸出するに至れり、產出量最多きは湘潭及益陽にして長沙之につき衡州及常德亦多少の產あるも論ずるに足らず、益陽は其出盛り時期に於て月額約八萬本見當に達し湘潭之につき約六萬本、長沙は二萬本、衡州は一萬本内外なり、竹材は孟宗竹にして當地方は眞竹を用ひず、紙は雁皮紙なるも質良好ならず柄竹は男竹女竹を用ふ其製產品は紙質不良劣惡にて耐久力なく桐油を多量使用する爲めに裂け易く體裁不良なれば到底日本傘と競争しがたし、ただ其の特長とする點は桐油を多量に用ひるを以て長雨には日本傘よりも好適なりと稀濫は長雨に際し日本傘の如く剝奪するを防ぐの利あり、傘首製作も亦傘と同じ量に作られ各地に輸出せられ日本向傘首の產亦少からず、支那傘の日本内地に輸入せられしは明治三十年前後にして當時既に失敗の歴史を有し、品質及體裁に於て到底日本品に對抗し能はざるも、近年日本諸物價の騰貴は製傘材料の暴騰を告げ、日本製品にも可成の粗製品影からず、之に乗じて再度侵入したるが支那傘なり、目下日本製普通品小賣相場は一本約一圓三四十錢程度なるを以て支那傘にやゝ入念なる改良を加ふれば其の低廉なる價格により相當販路を侵蝕しうべし蓋し長崎沖着價格は一本に付約銀四角五仙二厘、日本金換算約六十三錢にして關税は評價の四割にして十五錢乃至二十錢なるを以て、陸上費用を加算すれば合計一本につき金八十錢餘に當る、又傘首は日本陸上げ後一本につき三十二錢前後の見當なりといふ。

○安徽墨 は獨り支那に於て有名なるのみならず世界的名墨として浙江省湖州産筆と並び聲譽を博し遍く文人の垂涎する所なるが、製墨法は普通松煙、油煙、牛皮膠、樟腦の同原料と配合し最上等品には更に麝香、普通上等品には水片と稱する藥品を合し是等の配合量は秘法にして支那全國を通じて徽州人最も能くし、秘法は外省人の到底模倣だも爲し得ず、其名稱種類左の如し

清烟墨(最上等)、松烟墨(普通上等)、頂烟墨(中、下の二種) 喜烟墨(中下の二種)、藏烟墨(上中下三種)

原料産地は徽州府に屬する、休寧、初門、歙縣、婺源、績溪の六縣内に限られ、製墨も徽州府に限らる。

○内地に於ける乳肉卵の需要供給

(牛乳) 年額生産額(消費額)

人口百人當一ヶ年消費量

大正七年	三三六、一九五	六〇、四〇
八年	三三五、一一五	五九、五七
九年	三三二、四九五	六二、九九
十年	四五四、六二六	八〇、〇五
十一年	五二七、五六四	九一、五〇

煉乳内地生産量

内地消費量

人口百人當一ヶ年消費量

大正七年	一〇、八二〇、二二六	一一、九三三、六一九	二、八二
八年	一六、九〇二、九九四	一八、五八五、一四八	三、三、四六

九年	一二、八一四、五九六	一七、八六二、五九三	三、一、九二
十年	一三、〇八三、八三四	二〇、七四九、二四三	三、六、六七
十一年	一一、八七四、九三四	二一、五五五、八八二	三、七、三八

バター内地生産量

内地消費量

人口百人當一ヶ年消費量

七年	一、六六八、四三八	一、五五一、〇五六	二、七四
八年	一、八二七、一六六	一、七六五、一二九	三、〇八
九年	一、五〇五、〇三〇	一、八五〇、四五七	三、三〇
十年	一、六五四、〇六一	一、九三六、六七〇	三、二九
十一年	一、五六五、二三九	二、二四三、四三四	三、八九

右表により大正十一年中に本邦内地にて消費されたる牛乳は八一三、九三九石にて其内牛乳として五二七、五六四石(全體の約六四%)煉乳として一二九、三三五石(約一六%)バターとして一五七、〇四〇石(約一九%)消費され其他製菓用、チーズ、カゼイン等に使せられたり。即牛乳は輸出入皆無にして生産消費比敵せり、大正七年より同十一年迄五ヶ年平均の煉乳の消費量は内地生産に比し約一〇%乃至八一%増加し、バターの消費量は内地生産に比し約二三%乃至四三%増加せり。之等の増加消費量は外國より輸入されるものにて煉乳は米國、濠洲、英國、加奈陀より年々約五〇〇万封度乃至九〇〇万封度を輸入すバターは濠洲、米國、和蘭、加奈陀より年々約三〇万封度乃至五三万封度程輸入さる。

牛乳生産地——一乃乃至九万石——

北海道、東京、静岡、大阪、千葉、兵庫、神奈川、京都、愛

知、福岡、等

煉乳生産地——〇〇万封度乃至四〇〇万封度

北海道、静岡、千葉、東京、兵庫、石川等

バター生産地——〇〇〇〇封度乃至四〇〇〇〇〇〇封度

北海道、兵庫、東京、千葉、神奈川、佐賀等

牛乳及び乳製品の消費地は東京、大阪、横濱、神戸、静岡、名古屋等の都市を主なるものとす。

本邦内地畜肉消費量

年次 區別 畜肉消費斤量 牛肉斤量

大正 内地肉 一一二、二二八、五五七
移輸入肉 三、〇二九、四七九
計 一一五、二五八、〇三六

人口百人當一ヶ年畜肉消費量

八年 内地肉 一一四、八六九、九九五
移輸入肉 五、六五三、八三五
計 一二〇、五二三、八三〇

同上

九年 内地肉 一二四、二〇四、九六七
移輸入肉 一八、七一一、五一七
計 一四二、九一五、四八四

同上

十年 内地肉 一四七、〇九九、九八七
移輸入肉 二五、一〇一、四五〇
計 一七二、二〇一、四三七

雜報

同上

十二 内地肉 一四九、三四一、二〇八 一一一、六〇八、九〇八
移輸入肉 二七、五六三、〇八八 二五、四二二、五四三
計 一七六、九〇四、二九六 一三九、〇三一、四五一

同上

畜肉中主なるものは牛肉、豚肉、雞肉、馬肉にて就中牛肉は最も多く消費され大正十一年中の消費量は全體の六一、六%に當り豚肉一七、三%、鶏肉一四、六%、馬肉六、四%、羊肉〇、〇〇六%等なり。

本邦内地禽肉消費量

年次 禽肉生産量(消費量) 人口百人當一ヶ年消費量

大正七年 三七、二五〇、二三七 六六、九
八年 三五、二七七、六一二 六二、七
九年 三五、二六八、六五〇 六三、〇
十年 三一、六二三、五一九 五五、七

即禽肉(大部分は牛肉)の移輸入量は内地生産量の凡三%乃至一八%に相當してゐる。

内地肉を供給する肉用牛は、中國六縣及び大分鹿兒島等にて生産さるゝものなるが之等の生産地より又は三重香川愛媛等の肥肉地方より東京、大阪、横濱、神戸、名古屋、京都、廣島等の消費地に移入屠殺され食用に供せらるるなり。移輸入の殆ど全部は牛肉にして支那、朝鮮、加奈陀、濠洲、米國より絞肉として移輸入せらる。

豚の主なる生産地方は東京、神奈川、沖繩、鹿児島、愛知、千葉、静岡、群馬、茨城、埼玉等とし主なる消費地は東京、横濱、沖繩、鹿児島、千葉、愛知、神戸等なり。

鶏は千葉、愛知、茨城、静岡、埼玉、鹿児島、高知、香川に多く生産せられ其消費地は東京、大阪、京都を主なるものとす馬の主なる生産地方は北海道、岩手、青森、秋田、福島、宮城、鹿児島、宮崎等にてその用途は役用を主限するも食用にしても亦相當の量の消費さるゝを見る、その最も多き地方は東京、長野、熊本、岐阜、北海道、鹿児島、福岡等にして之等の地方にては夫々年額約七〇万斤乃至一八〇万斤を消費せり。

本邦内地肉製品産額

年次	「ハム」「ベーコン」類	合計
大正七年	一、九五、六七九	三、四六、六六九
八年	一、八六、三三九	四、三三、七七一
九年	二、三三、九六六	六、四三、七五七
十年	一、八〇、六六五	六、一八、〇七七
十一年	一、七六、四九七	五、〇五、八四七

即肉製品として消費さるゝ量は畜産肉總消費に對し一・五%二・九%といふ極めて少量なるものなり。近年肉製品の輸入さるゝもの多少あれど記すべき程の量ならず。

本邦内地家禽卵(主として鶏卵)消費量

年次	内地生産量	輸入量	輸出量	消費量	一人當消費量
大正七年	一〇八、九〇〇、三〇〇	六、五八、〇〇〇	三、四、九〇〇	一一五、〇一、二〇〇	三、三三、二

八年 一〇九、六八、〇〇〇 一〇、〇〇〇、〇〇〇 三、五、一三〇 一二三、一八、〇〇〇
 九年 一〇七、〇八一、四〇〇 三、四八、〇〇〇 一、七、六〇〇 一一三、五九、〇〇〇
 十年 一〇、〇〇〇、〇〇〇 五、九六、〇〇〇 一、〇、〇〇〇 一〇、〇〇〇、〇〇〇
 即内地生産費は消費量の約六五%乃至九一%に當り其不足額は支那から補給され上海天津青島より年々一〇〇〇万斤乃至六〇〇〇万斤輸入さる。

内地生産地の主なるものは千葉愛知茨城北海道静岡鹿児島栃木埼玉兵庫福岡長野岡山三重等にして何れも三〇〇〇万個以上を産す、この消費地の主なるは東京大阪横濱神戸京都等なり。

要之本邦内地に於ける最近五ヶ年間の乳、肉、卵の生産量は全體に於て増加しつつあるも、年々の消費を充すに足らず執れも輸入量は逐年増加す。

○我が國內地の茶業趨勢

イ、茶の生産状況

茶栽培面積—最近五ヶ年(大正七年より大正十一年まで)平均におきて四八〇〇〇町歩なり。この増減の趨勢を見るに年によりて、もとより消長あれど年々減少の傾向にありて之を前五ヶ年(大正二年より大正六年まで)平均の四九〇〇〇町歩に較ぶれば一〇〇〇町の減少を示せり。

製茶の産額—年により増減あるも茶樹栽培法の改良及び製茶法の進歩によりて茶樹栽培面積の減少に反し漸時増加の傾向を示せり。最近五ヶ年(大正七年より大正十一年まで)平均にては六一〇〇万斤の價格三二〇〇余万円に達せり。

主なる産茶地―内地における製茶の主なる産地は静岡縣（略
總産額の四〇％内外を占む）を第一とし、三重、京都、奈良、
鹿児島、岐阜、滋賀、熊本、埼玉、茨城、宮崎、福岡、高知の
府縣にて、静岡三重の二縣は輸出向製茶の生産多く、京都奈良
埼玉滋賀の諸縣は内地向の優良茶の生産地なり。

マ、製茶貿易の状況

製茶輸出状況―製茶の輸出貿易は年により消長あるも、歐洲大
戰以前は毎年三〇〇〇万斤以上を輸出せしが大戰中より頓に増
加して大正六年の如きは五〇〇〇余万斤の巨額に達せしも大正
八年以後年々減少して大正十年には僅に一二〇〇万斤を輸出せ
しにすぎず。こは三四十年來の不況にて、翌大正十一年には二
二〇〇万斤に達し稍恢復の兆を認めたるも、之を戰前に較ぶれ
ば其差は頗る遠し。かく輸出貿易の不振となりし原因は種々あ
るも近時わが國の製茶價格の騰貴と品質の低下せしため外國市
場特にわが國製茶の最大需要地なる米國及び加奈陀におきて、
コーヒー、印度錫蘭爪哇等の産茶と競争上不利となりしことと多
大なれど、米國加奈陀兩國市場に於けるわが綠茶の根底淺から
ざるのみならず、之等に次ぎ將來有望なる市場と認めらるゝロ
シヤ領アフシャの秩序も次第に恢復するに從ひてこの方面の取引
もまた漸時活況を呈すべく予想せられ今後わが國輸出製茶の品
質を吟味し、かつ相當廉價に供給すると同時に販路の擴張に努
力せば製茶輸出貿易の前途は悲觀する要なし。

現在わが國製茶の主なる輸出先は米國（總輸出額の八、九割）

加奈陀にて關東州ロシア領アフシャ支那等にも輸出せらる。
製茶輸入状況―わが國內地に於ける製茶の輸入額は未だ多か
らず。最近五ヶ年平均五十六万斤其價格は三十四万円に過ぎざ
るも最近の傾向は漸時増加の趨勢を示し之が輸入先は英領印度
及び支那なり。

ハ、製茶消費状況

日本内地の消費量―これは統計の示す所によれば、一ヶ年四
〇〇〇万斤内外にて人口一人當の消費量は〇、七斤内外なり。
然るに内地に於ける製茶の生産額はその統計に現はれたる數字
より多きものなれば實際の消費量も上記の數字より大なるもの
なり。

製茶の消費量は人口の増加及び生活程度の向上に伴ひて、年
々増加する他面には、最近の状態にては生産額は需要額に比し
常に不足を訴へつゝある状態なれば製茶生産の増加を圖るは極
めて緊要のことなり。

○全國中等學校（大正十三年四月三十日現在）

中學 校	四八九校	生徒定員	三四九、三五五名
高等女學校	五七四校	生徒定員	二八六、三五〇名
實科高女校	一六五校	生徒定員	三四、一一〇名

（文部普通學務局發表）

○在外鮮人の状況

北間島及び琿春方面	四〇一、三〇〇
西間島方面	二五〇、九〇〇

東支沿線方面

一七、六七〇

奉天吉林方面

一四二、三五〇

關東州

一一五

支那本部方面

一、四三〇

露領西比利亞方面

二〇五、五三〇

北米方面

二二、一〇〇

歐洲方面

二五

朝鮮人の接壤支那領及び露領方面に於ける移住はその沿革頗古し。その他の方面に至りては韓國が諸外國と通商を開知したる以後の事にて、その歴史新しきに係らず海外移住者の約百余万といふ多數に上れり。その最も多き所は接壤支那領及び露領方面なり。この百余万といふ數は實査せし所にはあらずるも比較的確實と認めらるゝ諸般の情報等を綜合統計したる結果得たるものなり。

い、北間島及び珲春方面——は西間島地方と共に鮮人移住の歴史比較的古く且鮮内地（咸鏡北道邊）に比すれば沃野多く、人口稀薄生活豊なり。この地方は支那人より鮮人の方多數を占め數に於て約五倍の多數なれば地方富源の開發は主として鮮人の手に依るといふも過言ならず。その上、鮮人の土地所有權の認めらるゝ特殊の地方なれば土着鮮人も相當多數にて生活も他の地方に比して遙に裕かなり。

る、西間島方面——之は鮮人の稱呼にて行政上の名稱にあらず朝鮮の平北咸南の對岸鴨綠江に沿へる南北に長さ一帯の地な

ふなり。古來彼我の關係甚だ密なるものありて所謂朝鮮幕府の語あるにても知らる。先頃奉直戰ありてより馬賊不逞鮮人跋扈して其慘害を蒙り。鐵道沿線に移りしもの少なからず。

は、奉天吉林方面——沃野千里の滿洲は地味饒確なる朝鮮より來りたる者の爲には到る所樂土なる上に法治生活に馴れざる連中には、原始的の生活を營み得る滿洲の奥地こそ實に自由の樂園たるものと考へ、その得意とする水田火田を以て唯一の生業とせり。こゝも奉直問題の事ありて後は漸時鐵道沿線に移動せんとする傾向あり。

に、支那本部方面——上海北京に有力なる鮮人の集合せるを見る、人參の行商を以て糊口を凌ぐもの多少あるも、學生も可なり多數に上れり。

は、露領西比利亞方面——帝政時代開墾事業に鮮人を使役せんとして鮮人の移住を保護獎勵しかつ相當優遇したる爲、漸時奥地に入込み農業、漁業、砂金採取等に從事し、大いに成功して土着人と成りしものありけるが前年の改變以來間島或は鮮内地に引揚げたるもの多し。

へ、北アメリカ方面——滿洲及びシベリヤ方面を除きては北アメリカ特に布哇群島は最多數鮮人の移住地となれり。勿論大多數は勞働者なるも他の地方に比し生活も教育も幾分上等の部に屬せり。

以上の他ヨーロッパ及び南洋方面にも多少の鮮人移住せるが如きも未だ有力なる發展をなしたるを聞かず。